

# 韻鏡データベース

住 谷 芳 幸

文化創造学部文化創造学科

(2006年11月9日受理)

Inkyo Database

Faculty of Cultural Department, Department of Cultural Department,  
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501 - 2592)

SUMIYA Yoshiyuki

( Received November 9 , 2006 )

## 1 はじめに

数年来、中国中古音を明らかにすることを目的として、その基礎的な資料である『大宋重修広韻』以下では『広韻』とする)を、コンピュータ上で利用可能にするために、そのデータ化を行い、2006年3月にその成果であるデータを、「広韻・韻鏡データベース」と名付け、インターネット上で公開した。また、その報告を本紀要上でも公表した。「広韻・韻鏡データベース」は、『広韻』に掲出された全漢字につき、その『広韻』での位置・反切等の情報と、それらの漢字の『韻鏡』での転・等位等の情報とを知るためのデータである。

ところで、「広韻・韻鏡データベース」の「韻鏡」部分は、『広韻』に掲出されたすべての小韻を、『韻鏡』の43枚の図上に位置付けることを目的とし、『広韻』の反切から推定される『韻鏡』上の位置を示したものである。そのため、その位置は『韻鏡』そのものに示された漢字の位置ではない。『広韻』の反切から推定される「韻鏡」の位置と、実際の『韻鏡』上で示されている位置とには、少

なからぬ ずれ がある。この ずれ が、単に『広韻』あるいは『韻鏡』の 誤り(誤写等も含めて)によるものなのか、あるいはそれぞれに反映する中国漢字音の体系の違いによるものなのかは、慎重な検討が必要であろう。また、 ずれ のない部分についても、『広韻』の小韻の代表字と『韻鏡』上の漢字とに違いのある場合が、少なからず見出される。そのため、『広韻』と『韻鏡』とにどのような違いがあるかを知ることが、「広韻・韻鏡データベース」を利用するためには重要である。

前述の通り、『韻鏡』は43枚の「転図」からなる。1枚の「転図」は、横を「唇」舌「牙」「齒」喉「半舌」半齒」の「七音」に分け、さらに全体を23に細分化する。また 縦を「平」「上」「去」「入」の「四声」に分け、それぞれを「一等」から「四等」までに分けることで、全体を16に細分化する。そのため、『韻鏡』上に示される一つの漢字に対して、「転」および「七音」「四声」の位置を付加することで、『韻鏡』上での位置が特定される。このデータに、「広韻・韻鏡データベース」の「韻鏡」部分を併合すれば、『韻鏡』と『広韻』との違い

を知ることが可能となろう。そこで、『韻鏡』と『広韻』との違いを知ることが目的とし、『韻鏡』のデータ化を行い、名称を「韻鏡データベース」として公開することとした。

## 2 韻鏡データベース

「韻鏡データベース」は超漢字付属のマイクログラフカードを用いて作成した。また、「韻鏡データベース」は次のように設計されている。

漢字(韻鏡)	: 文字
漢字(広韻)	: 文字
転	: 数値
七音	: 文字
七音(数値)	: 数値
四声	: 数値
等位	: 数値
反切	: 文字
反切(校勘前)	: 文字
上字	: 文字
下字	: 文字
上字(校勘前)	: 文字
下字(校勘前)	: 文字
頁	: 数値
行	: 数値
韻目	: 文字
小韻順	: 数値
小韻番号	: 数値
備考	: 文字

### 2.1 漢字(韻鏡)

「漢字(韻鏡)」および次の「漢字(広韻)」の項目では、超漢字で用いられている文字コードである TRON コードの 8 面・9 面の大漢和辞典収録文字を用いている。ただし、字体の問題で大漢和辞典収録文字以外の文字を用いたものが、「漢字(韻鏡)」の項目では 10 字ある。また、ふさわしい文字がないた

め、2 字の漢字により合字として表現した文字が、「漢字(韻鏡)」の項目では 3 字ある。なお、合字は次のように用いた。

[女圭] は 娃 を表す  
{亞土} は 聖 を表す

「漢字(韻鏡)」の項目には、龍宇純『韻鏡校注』(藝文印書館)所収の永禄本『韻鏡』上の漢字が入力してある。永禄本『韻鏡』を用いたのは、入手しやすさを考慮したものであり、最善本と考えたからではない。『韻鏡』は、写本・刊本とも複数現存しているが、それらの内容は微妙に異なっている。もちろん、各本の違いをデータ化することも可能ではあるが、かなり煩雑なデータとなろうし、ここでの目的とは異なる。そのため、とりあえず入手しやすいであろう永禄本『韻鏡』を用いてデータ化した。写本・刊本、またそれぞれの内容等については、馬淵和夫『韻鏡校本と廣韻索引』(日本学術振興会)等を参照されたい。

### 2.2 漢字(広韻)

「漢字(広韻)」の項目も、「漢字(韻鏡)」の項目と同じく TRON コード 8 面・9 面の大漢和辞典収録文字を用いている。ただし、字体の問題で大漢和辞典収録文字以外の文字を用いたものが、「漢字(広韻)」の項目には 2 字ある。また、ふさわしい文字がないため、2 字の漢字により合字として表現した文字が、「漢字(広韻)」の項目には 2 字ある。

「漢字(広韻)」の項目には、『校正宋本廣韻』(藝文印書館)の各小韻の代表字が入力してある。『広韻』の各小韻の代表字には、前に述べた TRON コード 8 面・9 面以外の文字あるいは合字を用いた 4 字以外にも、諸橋轍次『大漢和辞典』(大修館書店)に含まれな

い、すなわち TRON コード 8 面・9 面の大漢和辞典収録文字で表現できない文字が 18 字ある。この 18 字のうち 16 字は、周祖謨『廣韻校勘記』(商務印書館)に従い、その校勘の漢字を入力した。ただし、その漢字が『廣韻校勘記』記載の漢字であることを示すために、その漢字の後ろに「(校勘)」の文字を付加してある。なお、『廣韻校勘記』記載のすべての校勘の漢字を採用した訳ではない。『廣韻校勘記』で校勘を加えられている漢字が、『大漢和辞典』では『広韻』あるいは他の文献を出典として採録されている場合が多く、『大漢和辞典』収録の漢字に従い、その漢字を採用したためである。18 字中の残りの 2 字は『大漢和辞典』に含まれず、また『廣韻校勘記』にも記載がないため、私に決定した。この 2 字には、その漢字の後ろに「(校)」の文字を付加した。

なお、『広韻』の各巻末尾に「新添類隔今更音和切」として掲出された漢字については、採録していない。

### 2.3 転

「転」の項目は、『韻鏡』での転次である(1 から 43 まで)。「漢字(韻鏡)」に対応する「転」七音「四声」等位の項目は、実際の永禄本『韻鏡』での位置である。これに対し、「漢字(広韻)」に対応する「転」七音「四声」等位の項目は、『広韻』の各小韻の代表字の反切から推定される位置である。

### 2.4 七音

「七音」の項目は、『韻鏡』での縦の行を『韻鏡校本と廣韻索引』に従い、片仮名で示したものである(口からウまで)。

### 2.5 七音(数値)

「七音(数値)」の項目は、「七音」の項目

をイロ八順に並べるためのものである(1 から 23 まで)。

### 2.6 四声

「四声」の項目は、『韻鏡』での横の段を『韻鏡校本と廣韻索引』に従い、数値で示したものである(1 から 16 まで)。なお、『広韻』の小韻の中には、他の小韻と同音と考えられ、そのため『韻鏡』上で重複する位置となる場合がある。また、同音ではないものの韻図の性質上、『韻鏡』上で重複する位置となる場合もある。このような場合、重複した漢字には「四声」の数値に小数点以下 1・2 を加えて、例えば「8.1」「8.2」のように示した。

### 2.7 等位

「等位」の項目は、『韻鏡』での等位を数値で示したものである(1 から 4 まで)。「四声」の項目が小数点以下を含む場合であっても、ここでは 1 から 4 までの整数で示した。

### 2.8 反切

「反切」の項目は、『広韻』の各小韻の代表字に付された反切である。ここでも TRON コード 8 面・9 面の大漢和辞典収録文字を用いた。『廣韻校勘記』に記載のある反切については、『廣韻校勘記』記載の反切であることを示すため、反切の後ろに「(校勘)」の文字を付加した。なお、又切により各韻末尾に追加した小韻の場合は、その又切で示された反切を用いた。当然の事ではあるが、この「反切」の項目から 2.7 「小韻順」の項目までは、『広韻』の各小韻の代表字、すなわち「漢字(広韻)」の漢字に対してのデータであり、『広韻』に対応する漢字のない「漢字(韻鏡)」の項目に対しては、これらのデータは入力されていない。

## 2.9 反切(校勘前)

「反切(校勘前)」の項目は、「反切」の項目が『廣韻校勘記』記載の反切の場合に、『広韻』で記載されているもとの反切を示したものである。

## 2.10 上字・下字

「上字」「下字」の項目は、「反切」の項目を上字と下字とに分けて示したものである。なお、『廣韻校勘記』記載の反切の後ろに付加した「(校勘)」の文字は、ここでは付加していない。「(校勘)」の文字を付加しなかったのは、「上字」「下字」の項目により漢字の音を確認する際、「(校勘)」の文字がない方が都合がよいと考えたからである。なお、『廣韻校勘記』記載の反切かどうかは、「反切」の項目によって判断可能である。

## 2.11 上字(校勘前)・下字(校勘前)

「上字(校勘前)」「下字(校勘前)」は、「反切(校勘前)」の項目を上字と下字とに分けて示したものである。

## 2.12 頁

「頁」の項目は、「漢字(広韻)」の項目に示された漢字の『校正宋本廣韻』での掲出位置の頁数である(22から546まで)。

## 2.13 行

「行」の項目は、「漢字(広韻)」の項目に示された漢字の『校正宋本廣韻』での掲出位置の行数である(1から10まで)。

## 2.14 韻目

「韻目」の項目は、『広韻』での韻目である。

## 2.15 韻目順

「韻目順」の項目は、『広韻』で「東第一」のように各韻目に付された数字を数値で示したものである。

## 2.16 小韻順

「小韻順」の項目は、各韻での小韻の順序を1からの連続した数値で示したものである。この「小韻順」は、又切等により各韻末尾に新たな小韻として追加した漢字にも付されている。

## 2.17 小韻番号

「小韻番号」の項目は、『広韻』での各小韻の代表字に対し、その出現の順序を1から連続した数値で示した、その番号である(1から3874まで)。なお、注文中の又切により追加した項目については、「小韻番号」として5001からの連続した番号を付した(5001から5030まで)。ところで、『廣韻校勘記』では、『校正宋本廣韻』231頁10行第4字の「欲」の項目を新たな小韻として独立させ、その反切を「丘凡切」としている。この項目については「小韻番号」を6001とした。

## 2.18 備考(韻鏡)

「備考」の項目は、字形の注記等の雑多な内容を備忘として記入したものである。削除することも考えたが、利用上多少の便があるうかと残したものである。

## 3 『韻鏡』と『広韻』

以上、「韻鏡データベース」の構成について、簡単に説明してきた。ここでは、この「韻鏡データベース」を利用し、『韻鏡』と『広韻』との違いを簡単に見てみたい。

上記の「韻鏡データベース」の中で、有効

な「漢字(韻鏡)」の項目,すなわち「漢字(韻鏡)」の項目に漢字が入力されているものは,3893項目である。そのため,永禄本『韻鏡』上に示された全漢字は3893字であることになる。同様に有効な「漢字(広韻)」の項目,すなわち「漢字(広韻)」の項目に漢字が入力されているものは,3905項目である。ただし,3905項目中には,注文中にある又切により追加した30の項目,『廣韻校勘記』の記載により追加した1の項目も含まれる。また,この3905項目中には,他の小韻と同音のもの,あるいは同位置となるものが52項目含まれる。このため,実際に『韻鏡』上に位置付けることのできる小韻は3853となる。前に永禄本『韻鏡』上の全漢字は3893字であるとしたが,すでに『広韻』の小韻数と異なっているのである。

『韻鏡』上に位置付けられた『広韻』の3853の小韻の同位置に,永禄本『韻鏡』でも漢字が存在する項目が,3672項目ある。この3672項目の内,「漢字(韻鏡)」の漢字と「漢字(広韻)」の漢字とが一致している項目は,3384項目である。ただし,この3384項目には異体字として一致している場合も含まれているため,異体字の認定次第では数の増減もありうる。残る288項目は,『韻鏡』上での位置は同じであるため,同音と考えられるものの,『広韻』の小韻の代表字と永禄本『韻鏡』上の漢字とが一致していない項目である。ただし,この288項目中202項目は,『広韻』の代表字とは一致していないものの,同一小韻に含まれている他の漢字とは一致している。そのため,確実に『韻鏡』上の漢字と『広韻』の小韻とが一致していないと考えられる項目は,85項目となる。現在のところ,この85項目の内54項目は,永禄本『韻鏡』の誤りであろうと考えている。一例をあげれば,永禄本『韻鏡』の第十七転,半齒音,入声,三等

に「月」とあるが,これは明らかに「日」の誤りである。残り,31項目は,誤りかどうかについては,現在のところ決定できない。一例をあげれば,永禄本『韻鏡』の第三十二転,喉音,清,入声,一等に「𪛗」とある。この「𪛗」の位置には,『広韻』では「烏郭反」の反切である「𪛗」が対応する。また,『広韻』中には「𪛗」は見出せない。この2字は字形が類似しており,『韻鏡』の誤りとして処理できそうである。ただし,『大漢和辞典』では,「𪛗」は『字彙』の「烏郭反」を典拠として採録されている。そのため,『広韻』には掲出されていないが,「𪛗」という漢字があり,永禄本『韻鏡』ではその字によったとも考えられるからである。同様な例がいくつか見出される。

『韻鏡』上に位置付けられた『広韻』の3853の小韻の位置に,永禄本『韻鏡』では漢字が存在しない項目が,181項目ある。この181の項目の内,118項目は『七音略』等の他の韻図では,「漢字(広韻)」の対応する位置に対応する漢字があり,永禄本『韻鏡』の誤りとして処理できそうである。残りの63項目の内23項目は,転次,等位は異なるものの永禄本『韻鏡』に含まれる。ただし,この23項目を永禄本『韻鏡』の誤りとするのか,『韻鏡』と『広韻』との漢字音の体系の違いとするのかは慎重な検討が必要であろう。残り40項目が,現在のところ『広韻』の漢字に対し,永禄本『韻鏡』で対応する漢字が存在しない項目である。この場合も,この違いを永禄本『韻鏡』の誤りとするのか,『韻鏡』と『広韻』との漢字音の体系の違いとするのかには慎重な検討が必要であろう。

以上,簡単に『韻鏡』と『広韻』との違いについて見てきた。これ以外にも,『韻鏡』のみに見出される漢字についてなど,検討すべき課題は残されている。それらを含め,「韻

鏡データベース」の本格的な利用については今後の課題としたい。

#### 4 おわりに

この「韻鏡データベース」については、「広韻・韻鏡データベース」と同様に、インターネット上での公開を予定している (<http://www.gijodai.ac.jp/user/sumiya/data.htm>)。また、その公開にあたっては、「韻鏡韻図」および「広韻韻図」を添付する予定である。「韻鏡韻図」は、永禄本『韻鏡』を出来る限り忠実に再現しようとしたものである。もちろん、「韻鏡韻図」は超漢字上のワープロソフトで

ある基本文章編集を用いて作成したものであり、忠実に再現できない部分も残った。「広韻韻図」は、『広韻』の各小韻の代表字を『韻鏡』の43枚の図上に配置したものである。「韻鏡データベース」は、数値のみのデータであるため、その実際の位置を視覚的に確認可能にするために作成したものである。

最後に、この「韻鏡データベース」を作成するにあたり、岡島昭浩氏作成の「反切解釈(広韻反切と韻鏡)」(<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~okajima/ingaku/jion.htm>)を参考とした。この場をかり、お礼申し上げたい。